資　料

臨地実習における看護学生の達成感に影響する要因の検討

原田　秀子*

要約

臨地実習での学生の達成感に影響する要因を分析することで、学生が達成感を持つことができるような教員の実習指導の方向性を明らかにすることを本研究の目的とした。研究対象は本学に在学する３年次学生43名であり、成人看護学実習Ｉと老年看護学実習終了後に、達成感と達成感に影響する６つの要因について質問紙調査を行った。その中で、達成感の程度を５段階の間隔尺度を用いて調査し、次に達成感に影響した要因について、その影響の程度を５段階の間隔尺度を用いて調査した。

達成感の得点の平均値は実習全体で3.82であった。達成感への影響要因のうち、成人看護学実習Ｉではグループメンバーとの関わりの平均得点が最も高く、老年看護学実習では患者との関わりの平均得点が最も高かった。

達成感への６つの影響要因のうち、患者との関わり・自分自身の２つの要因で達成感との関連が認められた。このことから、患者との良い関係を作るためのサポートや、実習中の経験が自信につながるよう、学生の努力を認めていくことが達成感を高めるための教員の役割として必要であることが示唆された。

キーワード：達成感、影響要因、臨地実習、実習指導

Ｉ．はじめに

学生が感じる達成感や満足感は、学生の学習意欲を刺激し、学習活動を促し、目標達成という学習成果を獲得するために重要である[1]。特に臨地実習(以下実習と略す)では、学生は様々な困難に遭遇する。それを乗り越えていく中で得られた達成感は学習意欲を向上させ、主体的な学習を促す。

本研究の目的は、実習での達成感に影響している要因を分析することで、学生が達成感を持つことができるような教員の実習指導の方向性を明らかにすることである。

原田ら[2]の報告では、実習における達成感に影響する要因として、患者との関わり・臨床指導者との関わり・教員との関わり・グループメンバーとの関わり・既習の学習・自分自身の６つがあげられており、そのうち患者との関わり・教員との関わり・グループメンバーとの関わり・自分自身が達成感に大きく影響していることが明らかになっている。教員が直接学生をサポートし、指導することによって得られる達成感だけでなく、教員が調整役としての役割を効果的に果たすことで、患者との関わり・臨床指導者との関わり・グループメンバーとの関わりも学生の達成感にプラスに働くと考える。そこで、原田ら[2]の研究でとりあげた６つの影響要因を、本研究では学生の達成感に影響する要因としてとりあげ、追加検証し、今後の実習指導の方向性を検討したので報告する。

ここでの達成感とは、ある目的目標を達成し成功したという感覚と定義する。

II．研究方法

１）研究対象

本学看護学部の2001年度入学生で３年次に在学する学生43名（内訳：女性39名、男性４名）

対象学生は２年次後期までに基礎看護学実習を終えている。３年次前期に、成人看護学実習Ｉ（主に慢性期にある成人患者対象）と老年看護学実習を、前半と後半でローテーションしながら３週間ずつ行う。３年次後期には成人看護学実習II（主に急性期にある成人患者対象）を予定している。学生は、各実習とも７～8名のグループに分かれ、主に病棟での実習を行う。各病棟に担当教員が１名配置され、臨床指導者と連絡を取り合い実習指導にあたる。

２）実習方法

成人看護学実習Ｉ

３週間の実習期間のうち２週間は病棟実習を行

＊山口県立大学看護学部

い、1週間は透析室での見学実習（1日）と教員の指導のもとでの実習のまとめを行う。病棟実習では主に成人期の患者を1名受け持ち、看護過程の展開を主にした実習を行う。

老年看護学実習

3週間の実習期間のうち2週間は病棟実習を行い、1週間は老人保健施設内痴呆棟での実習（1日）と教員の指導のもとでの実習のまとめを行う。病棟実習では老年期の患者を1名受け持ち、看護過程の展開を主にした実習を行う。

3）調査方法

2003年度成人看護学実習Ⅰ終了後及び老年看護学実習終了後（6月下旬と7月下旬）に質問紙調査を行った。無記名式の調査用紙を配布し、調査の趣旨を説明して承諾を得、記入後は回収箱を設置し、後日回収した。

4）調査内容

原田ら[2)]の調査内容に基づき、達成感と影響要因についての調査内容を作成した。

まず、実習の達成感について、得点化の基準を、5点：達成感があった～1点：達成感がなかったまでの5段階の間隔尺度で示し、回答は選択式とした。次に達成感に影響した要因については、1．患者との関わり　2．臨床指導者との関わり　3．教員との関わり　4．グループメンバーとの関わり　5．既習の学習（これまでの講義・演習・実習での学習すべてを指す）　6．自分自身（自己学習や自己の努力など）の6項目をあげた。原田ら[2)]は得点化の基準を、5点：そう思う～1点：そう思わないとしているが、本研究ではプラスに影響したかマイナスに影響したかを明らかにするために、5点：達成感を高めた～1点：達成感を低めたまでの5段階の間隔尺度で示した。回答は同様に選択式とした。また各影響要因について、達成感に影響した出来事を自由記載する欄を設けた。

5）分析方法

統計処理は、統計ソフトSPSS Ver10.0Jを用いて行った。分析方法は以下の通りである。

(1) 成人看護学実習Ⅰと老年看護学実習の各々において、達成感の得点と達成感に影響する6つの要因の得点の平均値を求める。

(2) 達成感にどの要因が強く関与しているかをみるために、達成感の得点と達成感に影響した要因の得点とを重回帰分析にて検討する。

Ⅲ．結果

質問紙は成人看護学実習Ⅰにおいて43部、老年看護学実習において43部、計86部配布した。回収数57部、回収率66.3％、有効回答数57部、有効回答率100％であった。

1）実習での達成感の得点と6つの影響要因の得点の平均値（表1）

達成感の得点の平均値は実習全体で3.82であった。成人看護学実習Ⅰでは3.77、老年看護学実習では3.87であった。

成人看護学実習Ⅰでは、影響要因としてグループメンバーとの関わりの得点の平均値が最も高く、既習の学習が最も低かった。老年看護学実習では、影響要因として患者との関わりの得点の平均値が最も高く、既習の学習が最も低かった。

2）達成感への影響要因の分析結果（表2）

達成感の得点を従属変数とし、達成感に影響した

表1　実習での達成感と6つの影響要因の平均得点

	老年（平均値）	成人（平均値）	総合（平均値）
達成感	3.87	3.77	3.82
患者との関わり	4.48	3.96	4.25
臨床指導者との関わり	4.26	4	4.14
教員との関わり	3.61	4	3.79
グループメンバーとの関わり	4.32	4.42	4.37
既習学習	3.52	3.73	3.61
自分自身	3.68	3.85	3.75

表2　重回帰分析による達成感の得点と6つの影響要因の得点との関係

従属変数／独立変数	達成感		
	β	γ	有意確率
患者との関わり	0.243	0.287	0.039*
臨床指導者との関わり	0.216	0.26	0.063
教員との関わり	0.102	0.128	0.365
グループメンバーとの関わり	0.155	0.184	0.192
既習学習	−0.1	−0.121	0.394
自分自身	0.421	0.419	0.002**

β＝標準偏回帰係数　γ＝相関係数　＊＊p＜0.01
R＝0.694　　R^2＝0.482　＊p＜0.05

６つの要因の得点を独立変数として重回帰分析を行った。その結果達成感との関連がみられたのは、患者との関わり・自分自身の２つの要因であった。

３）達成感に影響した出来事

６つの影響要因別に、達成感に影響した出来事を自由記載してもらった結果、患者との関わりについては、回答があった30名中24名が達成感を高めた内容を記載していた。そのうち、患者とのコミュニケーションについて取り上げていたのは20名であった。内容としては、初めはうまくコミュニケーションが取れなかったが、実習が進むにつれて良い関係が築けたという信頼関係の深まりについて記載していた。一方で患者との関わりに深まりがなかったと回答したものも４名みられた。

臨床指導者との関わりについては、回答があった29名中22名が達成感を高めた内容を記載していた。具体的には、指導・助言をもらえたことで問題解決につながった、方向性が明確になった、ケアを進めていく上で役に立ったという内容であった。また話しかけてもらえた、話をきいてもらえたという内容の記載もあった。学生自身の臨床指導者に対する姿勢として、積極的に関われなかったと回答したものが４名、報告がきちんとできなかったと回答したものが１名みられた。

教員との関わりについては、回答があった25名中22名が達成感を高めた内容を記載していた。具体的には、アドバイスがもらえた、相談できたという内容であった。学生自身の教員に対する姿勢として、積極的に質問できればよかったと回答したものが１名、相談しても解決方法が見つけにくかったと回答したものが１名みられた。

グループメンバーとの関わりについては、回答があった27名中22名が達成感を高めた内容を記載していた。具体的には、グループ内で、看護を展開する上でのお互いの悩みや問題を共有し合い解決することができたという内容であった。一方で意見交換が少なかったと回答したものも４名みられた。

既習の学習については、回答があった24名中12名が達成感を高めた内容を記載していた。そのうち、全実習期間のうちの前半に実施した実習（以下前半実習と略す）終了時の回答は４名であり、全実習期間のうちの後半に実施した実習（以下後半実習と略す）終了時の回答は８名であり、後半実習において達成感を高めた内容の回答数が増加していた。具体的には、これまでの講義の内容や２年次までの基礎看護学実習で学んだことが役に立ったという内容であった。達成感を低下させた内容を記載していたのは24名中12名であり、具体的には、勉強不足を感じたという内容であった。そのうち、前半実習終了時の回答は８名であり、後半実習終了時の回答は４名であり、後半実習において達成感を低下させた内容の回答が減少していた。

自分自身については、回答があった26名中16名が達成感を高めた内容を記載していた。具体的には、自己学習を含めて自分なりに頑張った、自信がついた、成長したという内容であった。一方で自分の看護に自信がなくなったと回答したものが３名みられた。また、もっと頑張れたのではないかと回答したものが５名、体調不良のため満足のいく実習ができなかったと回答したものが１名みられた。

Ⅳ．考察

達成感に影響する６つの要因について以下に考察する。

１）患者との関わりと自分自身について

重回帰分析の結果、達成感に影響する６つの要因のうち、達成感との関連がみられたのは患者との関わり・自分自身の２つの要因であった。

この結果から、学生が受け持ち患者との信頼関係を築くために努力したことが、実習での達成感に結びついており、結果で示した達成感の得点につながったと考える。

中谷ら[1]は、学生が受け持ち患者からの肯定的・支持的言動の表出場面を体験することによって、学生は自分自身の存在が患者に承認されたという満足感を味わう可能性があると述べている。自由回答の中に、患者の「待っとったんよ」という一言で救われた、「ありがとう」という言葉に達成感を得たという回答もあったことから、患者から認められたという実感を持つことも達成感につながったといえる。

また、達成感に影響する６つの要因のうち、老年看護学実習では患者との関わりの得点の平均値が最も高いという結果が得られた。これは患者との関わりが達成感を高めることにつながったことを示しており、その背景として、失語や難聴、痴呆などの影響でコミュニケーションが取りにくい患者と関わる

中で、困難な状況を経て信頼関係を築けたことによる喜びが大きかったことが伺えた。

老年看護学実習において、難聴や痴呆、失語などコミュニケーションが困難な患者を受け持っていた学生は43名中24名であり、そのうち22名の学生がコミュニケーションの工夫を看護計画に取り入れて実習していた。自由回答の中に、最初はコミュニケーションに悩んでいたが、真剣に関わっていくことで患者も少しずつ心を開いて下さり、自分も成長できたという回答もみられた。阿部ら[3]は、実習での患者との関わりの場面においての具体的な記載を分析し、患者との良好な関わりによって多くの学生が肯定的な感情を持つに至り、また肯定的な感情を持った経験はその後の学習意欲の向上につながったことを明らかにしている。学生の回答からも、悩みながらもうまくコミュニケーションが取れたことが肯定的な感情をもたらしており、それが今後の実習に取り組む上での自信につながっていくと考える。

このことから、学生が患者とのコミュニケーションを円滑に進めることができるようにコミュニケーション能力を配慮した患者選択を行うことよりも、学生にあえて少し困難な課題を与え、それに挑戦させることも、患者選択にあたっては必要であると考える。

また大村[4]は、学習目標としてラーニング目標（能力を高めることをめざすもの）を持たせることが、困難に直面してもあきらめずに課題への動機付けを維持させることにつながると述べている。学生の自由記載の中にも「患者さんとの関わりの中で何度か失敗することで少しずつ自分も成長したと思う」や、「実習を通して常に患者さんのことを考え、実施したことがだめなら別の方法というように色々な方法を考えられた」という回答もみられた。一方で自分の看護に自信がなくなったという回答もあり、その背景には自分なりの頑張りや努力を周囲から認められなかったことも影響していると考える。

このことから、学生が患者との関わりの中で困難に直面したり、失敗したと感じた時に、その経験を自分の成長につなげていけるよう、学生をサポートできる人的環境をつくることも、教員の役割として重要と考える。具体的には面接や実習記録から、学生が何につまずいているのかを引き出し、カンファレンスの場で同じような体験をしている学生との意見交換の機会を作ったり、臨床指導者と学生の状況を共有し、協力してフォローにあたることも必要と考える。また、失敗した経験であってもその中での学生の努力を認めていくことも達成感を高めるための教員の役割として必要であると考える。

2）臨床指導者との関わりと教員との関わりについて

重回帰分析の結果、臨床指導者との関わりや教員との関わりについては達成感との関連を認めなかった。このことは、教員や臨床指導者から指導を受けたことが直接達成感に結びついたというより、臨床指導者や教員からの助言が患者と良い関係を築くことに結びついたり、主体的な学習を促すことにつながったことを示していると考える。

阪本ら[5]は、看護学生に対する援助的関わりとして、①学生に関心を示す態度、②学生に対する支持的態度、③教育に対する前向きな態度、④学習の深まりや理解を促す指導（以下省略）をあげている。臨床指導者や教員との関わりについては、回答内容から、主に①と④の関わり、つまり学生に関心を向けてくれる姿勢と指導者からの指導や助言の両面が達成感につながっていると考える。

②での支持的態度とは、学生の感情や行動を肯定的に捉え支持する態度であり、指導者から承認された経験は自信となり、学習意欲の向上にもつながる。また、学生が実習に対して抱きやすい過度の不安や緊張を和らげ、学生が本来持っている能力を発揮することにもつながると考える。「私も学生のときに患者指導でとても苦労した。本当に難しいと思うけど頑張ってね。」と臨床指導者に声を掛けられたことで頑張ろうと言う気持ちが強まったという回答もあった。学生の立場に立ったフォローは、学生が困難を乗り越えていく上で有効な関わりであるといえる。また、③に示した指導者の教育に対する前向きな態度や、学生と共に学ぼうとする指導者の熱意は、学生にとって大きな励みになり、実習への取り組みにもよい影響を及ぼすと考える。学生が、ケアについての文献を探せずに困っていた時に教員が一緒になって探してくれたという回答もあり、学生と最も身近に関わることのできる教員の熱意が学習の意欲を高めることにつながっていると考える。

患者のケアに関して困難に感じていること、つまずいた点に関しては、患者と最も身近で関わっている臨床指導者からの個別性に則した実践的な助言が

有効と考えられる。そのため、個別指導だけでなく、病棟での患者カンファレンスの中で学生から積極的に相談を持ちかけるなど、助言を受ける機会をできるだけ多く設けるよう調整することも教員の役割として必要と考える。

3）グループメンバーとの関わり

重回帰分析の結果、グループメンバーとの関わりについても達成感との関連はみられなかった。しかし成人看護学実習Ｉにおいては６つの影響要因のうちグループメンバーとの関わりの得点の平均値が最も高いという結果が得られた。このことは、グループメンバー間で、看護を展開する上での悩みや問題を共有し解決できたことが達成感に結びついたことを示していると考える。自由回答の中に、カンファレンスを通してさまざまな意見を交換し、色々な考えを共有することができたという回答もあった一方で、意見交換が少なかったという回答もあった。そのことからも、教員の役割として効果的なカンファレンスの運営がグループダイナミックスを引き出す上で重要であることが示唆された。西元ら[6]は、カンファレンスを看護臨床講義と位置づけている。カンファレンスを有効な教育の機会にしていくために、ロールプレイの技法を活用したり、討議のきっかけをつくるため、学生にとって共通性のあるテーマを身近な体験談として教員が準備しておくなどの工夫も必要と考える。

4）既習の学習について

重回帰分析の結果、既習の学習についても達成感との関連はみられなかったが、成人看護学実習Ｉ・老年看護学実習共に、既習の学習についての得点の平均値が最も低かった。このことは、既習の学習の活用が不十分なことが達成感の低下につながっていることを示していると考える。また、自由回答の結果からは、後半実習において達成感を高めた内容の回答が増加していた。このことは、前半の実習で学習不足を感じたことがきっかけとなり、後半の実習では既習学習の内容を有効に活用できたためではないかと考える。

学生は実習に出てから学習の必要性に気付くことも多く、必要性に気付いた時に学習が深められれば達成感を高めることにもつながると考える。一方で、学生は実際の患者を目の前にした時、既習の学習をどう結びつけてよいのか分からず戸惑うこともあるので、理論と現実とが結びつくような指導が教員に求められる。例えば、実習前には、受け持ち患者の病態や治療の理解を助けるために事前に疾患や治療に関する情報を臨床から提供してもらっているため、病態についての復習にとどまらず、そこから看護に必要な情報収集の視点を明確にできるような指導が必要と考える。個人指導だけでなく、カンファレンスの機会などを通じて学習の動機付けを図ることも必要である。

5）本研究の限界と今後の課題

第１に調査用紙の回収率が低く、対象学生全体の回答内容を反映した結果になっていないことがあげられる。その場で記載してもらい回収するなど、回収数を増やすための工夫が今後においての課題である。

第２に達成感に影響した出来事の具体的記載が回収した57部中24部と半数に満たなかったことから、一部の学生の意見を反映した結果となったことがあげられる。その理由として、具体的記載が６項目と複数であったことから、記載に手間がかかりすぎたと考える。今回の記載内容をもとにいくつかのカテゴリーを作成し、選択式にすることで負担を少なくする方法を考慮することも今後に向けての課題である。

第３に、実習を直接担当した教員が調査を実施したために、結果にバイアスがかかった可能性があることも考慮しておく必要がある。無記名とし、実習評価とは無関係であることもあらかじめ説明したが、自由記載などは書きづらい面もあるため記載方法も検討する必要がある。

第４に、重回帰分析の結果決定係数が低く、今回用いた６つの独立変数以外の変数による影響が大きいことが推測された。このことから、６つの影響要因以外にも影響していると考えられる要因を加えて調査することで、信頼性を高めることになると考える。実習方法に対する有効性の得点化と達成感の得点化との関連性をみた研究[7]もあり、実習方法や実習期間、実習時期などカリキュラムについても影響要因として検討する必要がある。

Ｖ．結論

①達成感への６つの影響要因のうち、患者との関わ

り・自分自身の２つの要因で達成感との関連が認められた。

②６つの影響要因のうち、成人看護学実習Ｉではグループメンバーとの関わりの平均得点が最も高かった。老年看護学実習では患者との関わりの平均得点が最も高かった。

VI. おわりに

実習での達成感に影響する要因を分析することにより、教員の役割として、学生の学習を深めるための指導・助言を行う役割だけでなく、患者との良い関係を作るためのサポートや実習中の経験が自信につながるよう学生の努力を認めていくことが必要であることが示唆された。今後の実習指導に生かしていきたい。

引用・参考文献

1）中谷啓子他：短期大学（２年課程）看護学実習における学生の達成感・満足感に影響を及ぼす要因—成人・老人看護における人的環境の側面から—　東海大学短期大学紀要第33号、31-38、1999

2）原田慶子他：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習Ｉを考察する（第３報）—達成感・満足感への影響要因より—　日本看護学教育学会誌９(2)、74、1999

3）阿部明美他：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習Ｉを考察する（第４報）—患者との関わりの場面を通して—　日本看護学教育学会誌10(2)、142、2000

4）大村彰道：教育心理学Ｉ、東京大学出版会

5）阪本みどり他：看護学実習における臨床指導者の教授行動・教授態度—看護学生に対する援助的関わり—　日本看護学教育学会誌10(2)、105、2000

6）西元勝子他：看護臨床指導のダイナミックス、医学書院、43、1992

7）阿部明美他：学生の達成感・満足感から基礎看護学実習Ｉを考察する（第２報）日本看護学教育学会誌９(2)、73、1999

8）丹澤洋子他：看護学実習において教員、臨床指導者、看護婦・看護士が学生の達成感・満足感に影響を及ぼす要因の検討—成人・老人看護学実習の分析から—　東海大学短期大学紀要第33号、25-29、1999

9）杉森みど里：看護教育学第２版増補版、医学書院、1994

10）鳩野みどり：臨地実習における学習内容の学生による自己評価とプラスの影響要因・マイナスの影響要因、第32回日本看護学会論文集（看護教育）、26-28、2001

11）中島美和子他：臨地実習における看護学生の学習の達成感—人的環境からの一考察—日本医学看護学教育学会誌第12号、13-19、2003

Title : A Study of Factors That Affect the Students' Sense of Accomplishment in Nursing Clinical Practicum

Author : Hideko Harada*

* School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

Key words : sense of accomplishment, influential factors, nursing clinical practicum, clinical supervision

---